

京極読書新聞 <第19号>

発行日 平成22年12月 1日(水)
京極町生涯学習センター湧学館

京極から文学散歩 第7回 宮脇先生、最長片道切符の旅 湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

町はさびれても駅は小さくならない。

貿易会社の支社などが小樽を見捨てて札幌に移っても、小樽駅の建物は昔のままに立派だ。

最長片道切符。日本の鉄道を一筆書き。最初の駅、北海道広尾(ひろお)線・広尾駅をスタート。一枚の片道切符で、最後の駅、九州・指宿枕崎(いぶすきまくらざき)線の枕崎駅までの間、同じ駅を二度と通ることなく、その中で最大限に距離を稼ぐ旅。日本の鉄道マニアの開祖・宮脇俊三氏が小樽駅に立ったのは、その最長片道切符の第6日めのことでした。

町はさびれても駅は小さくならない…なんてカッコいい書き出しなのでしょう。小樽のさびしい風景を、このように簡潔、的確に言いあらわすのはたいした筆力です。(素人は「こんなもん、俺にだって書けるよ」と思うでしょうが、やってみればすぐにわかります。なかなか書けませんから。)

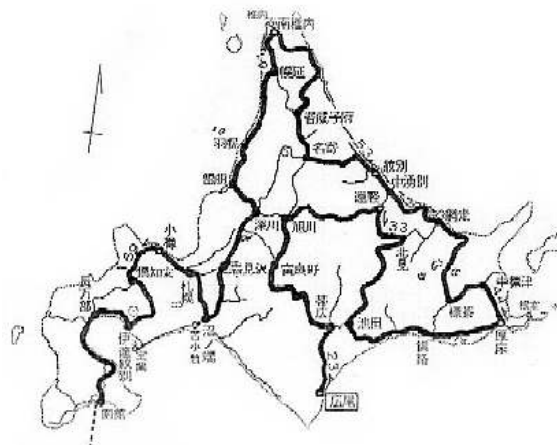
午前5時51分発の長万部行きが小樽駅を出発。余市、仁木、小沢と列車は快調に走り続けます。そして、倶知安駅。ここで宮脇氏は列車を降りてしまうのです。どうして？それは、倶知安から長万部までそのまま函館本線乗り継いでしまうと、距離が稼げないからです。倶知安駅には、もっと鉄路を乗ることができる必殺技がある。それが、胆振線。

倶知安と太平洋側の伊達紋別駅を結ぶ全長83キロのローカル線、胆振線。これを使って伊達紋別に出、そこから室蘭本線を経由して長万部に入ると、単純に函館本線で倶知安から長万部に行くよりも、倍くらいの距離を稼ぐことができます。(本当に、鉄道ファンというのは面白いことを考えるものですね。今も昔も…)

さて、胆振線クイズ。この駅名、読めるでしょうか？(スラスラ読めたら、かなりの鉄道オタク)

「倶知安」駅をスタート。最初の駅「六郷」。「参郷」、「寒別」。そして、京極町内に入って、「北岡」、「京極」、「東京極」、「南京極」。ここで京極町を出て、胆振線は喜茂別町に入ります。「留産」、「喜茂別」、「北鈴川」、「御園」。これで羊蹄山麓地帯はお終い。列車は、旧大滝村を通過、噴火湾の伊達方面に向かいます。「新大滝」、「優徳」、「北湯沢」、「蟠溪」、「久保内」。「壮警」駅で昭和新山を眺め、「上長和」を通り、終点「伊達紋別」駅へ。お疲れ様。約3時間の旅でした。

「最長片道切符の旅」／北海道部分



京極読書新聞第20号は
2月1日(月)発行予定です。

湧学館企画展示

きょうごくと国鉄胆振線

[昭和61年廃線の鉄道]

開催中です





中学生にこの一冊!

◆「十二番目の天使」 オグ・マンディーノ/著

絵に描いたような幸せな人生から一瞬にして絶望の淵に立たされた男が一人の少年との出会いを通して絶望から立ち直っていくお話です。

愛する家族に恵まれ、仕事でも大成功を収めた主人公ジョン。幸せな生活がある日突然の交通事故によって妻子を亡くす事で一変してしま

います。絶望の余り、自らも命を絶とうとする彼が友人に頼まれ少年野球チームの監督を引き受けたことで12人の天使たち(野球チームの男子たち)に出会います。彼らとの出会いを通して、とりわけタイトルにもなっている”十二番目の天使”ティモシーとの出会いを通してジョンは少しずつ生きる気力を取り戻していきます。恐ろしく野球が下手くそで何をやらせてもうまくできない、小さな男の子ティモシー。それでも「毎日、毎日、あらゆる面で僕はどんどん良くなっている!」「絶対、絶対、絶対、絶対、絶対、絶対あきらめるな!」と自分に言い続けて一生懸命がんばります。小さな身体で何事もあきらめず、常に前向きに生きようとするティモシーと出会った事が周りの人たちにも影響を与えていきます。

決してハッピーエンドな話ではありませんが、読み終わるといつもより少し前向きに物事を考えることができ、心が温かくなるそんなお話です。

◆「アナザー修学旅行」 有沢佳映/著

学校生活の一大行事の一つである修学旅行にそれぞれワケありで参加できなかった6人と1人。みんなが楽しく修学旅行に出かけている3日間。クラスも違うし、知り合いでもない彼らが一つの教室に集まり過ごしていく中で少しずつお互いの距離が近寄っていきます。

2日目に起きる”事件”を除けば起承転結というものもあまりなく淡々と彼らの3日間が骨折して修学旅行に参加できなかった主人公佐和子を通して書かれているのですが、今時の学生たちってこうなのかなあと是非、みなさんの感想を聞きたくなる話でした。

湧学館 打越 靖子(うちこし・やすこ)

◆「夜は短し歩けよ乙女」 森見登美彦/著

「黒髪の乙女」に思いを寄せ、偶然を装いながら遭遇し続ける「先輩」。乙女目線と先輩目線が交互に進み、お互い別の方向に向かっていくのに、あとから全てが一本につながる展開がミステリーの謎解きとはちょっと違って、ほっと暖かくなるようなすつきり感を味わえます。

少し堅苦しい文章に思えるかもしれませんが

が、「先輩」の熱意と勢いから生まれる名台詞は思わず声に出してしまいたくなること請け合いです。

◆「恋文の技術」 森見登美彦/著

主人公守田一郎氏が、研究のため京都の大学を離れ、能登の海辺でクラゲを眺める日々に飽き、いろんな人書きまくった手紙で綴られる小説です。相手からの返信は載っていないのに、返信に対する手紙や、同時期の他の人への手紙から京都で起こっている物事の輪郭が徐々に浮かび上がってきます。

手紙の修行をしながら、知り合いの作家に恋文の技術を訊ねるも失敗ばかり。方向性はそう間違っていないはずなのに、どうにも思いが飛びぬけすぎてしまったそんな「失敗書簡集」も見どころですよ。

湧学館司書 向出 絵梨香(むこうで・えりか)

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

